

第4章 PTSD理論の心理学 1 ——心身の反応が起こる原因

ふつうの市民が戦場で残虐行為を引き起こす理由

個人的な加害行為によってPTSD類似の症状が出る可能性については、PTSD理論の信奉者の間でも、既に20年以上前から検討されていて（たとえば、Harry & Resnick, 1986; Kruppa, Hickey & Hubbard, 1995; Thomas *et al.*, 1994）、2007年3月に開かれた日本トラウマティック・ストレス学会（第6回大会）でも、「加害者に認められるPTSD類似の症状」という演題のシンポジウムが催されています。そこでは、4名の発言者のうち2名が、それぞれ複数の事例を発表した後、座長が、「被害者だけではなく加害者にもPTSDに類似した症状が生じる可能性がある」と総括しています。その因果関係の当否は別にしても、こうした方向からも研究が行なわれるようになったことは、PTSD研究の歴史のうえで画期的なことだと思います。

本章と次章では、主体的な加害行為がPTSDの原因になりうるかどうかを、それとは別の角度からあらためて検討することになりますが、その前に、大量殺戮などの非道で残虐な行為がどうして起こるのか、その理由について考えることにします。その理由の検討が本章の大部分を占めるため、本書の論旨から外れるように見えるかもしれませんが、ある程度にしてもそれをきちんと把握しておかないと、主体的な加害行為とPTSDとされる症状との間に関係があるのかどうかについての検討や、あるとすればどのような関係なのかについての推測が難しいように思います。

ふつうの人間から非道な兵士へ

ナチに協力した医師たちにしても、ベトナムで捕虜や民間人を大量虐殺したアメリカ兵にしても、虐殺集団から離れれば、稀な例外を除いて、残虐性

加害者と被害者の“トラウマ”

とは無縁のごくふつうの市民です。そのようなふつうの人々が、上官の命令があるにせよ、その場の空気にもみ込まれるという形をとるにせよ、そろいもそろって残虐行為に加担してしまうのはなぜなのでしょう。これは、多くの人たちが疑問に感ずる、実にふしぎな現象ですが、人類発祥の昔から数え切れないほど繰り返されてきたという事実を考えれば、このうえなく重要な問題と言えます。西洋を代表する知識人と謳われたアーサー・ケストラーは、アメリカ合衆国による広島・長崎への原爆投下や、ナチス・ドイツによるユダヤ人大量虐殺を筆頭とする、こうした現象の総体を、現代文明への皮肉を込めて、人類の存亡にかかわる「種族的自殺」の一環と見なしていました（ケストラー、1969年、434ページ）。

この問題を検討するに際しては、まず、実際にどれほどのことが起こるものかをはっきりさせるため、そのような行為を実際に行なった人たちの証言に耳を傾けてみましょう。たとえば、日中戦争で中国大陸を転戦した元日本兵は、自らが行なってきた、正当とされる戦闘行為とは完全に異質な民間人に対する残虐行為について、次のように告白しています。

俺たちは兵隊にとられて戦地に来たことから、人を殺し、野荒らし、窃盗、強盗、放火、強姦と、法律で悪いとすることは全部し尽した。これだけのことを内地でしたならば、一生涯監獄の中で暮らすことになる。監獄ならまだよいほうで、死刑になるだろう。死刑も一回や二回では済むまい。命が幾つあっても足りはせないだろう。（曾根、1988年、209ページ）

「兵隊にとられて」とあるように、この男性をはじめとする元日本兵たちは、その点では自分たちを被害者と考えながら、その一方では、ベトナムのアメリカ兵（たとえば、ネルソン、2003年；本多、1981年a、第5部）にも勝るとも劣らないほどの残虐行為を、無用にして極悪非道な行為ということ十二分に承知しつつ、もう一方では、日本が勝っている限り「大目に見られるはずだ」という甘い期待を抱きつつ、中国大陸で平然と続けたのです。ふつうの社会生活であれば、稀に見る凶悪犯しか起こさないほどの凶行を、

かなりの比率の兵士が何度となく繰り返したのですが、にもかかわらず、アメリカのベトナム帰還兵とは違って、ほとんどは、それほどの良心の呵責や“PTSD”（戦争神経症）を起こすこともなく、平然としていられたようです。そのような蛮行を重ねてきた人たちの中には、人の命を救う立場にある医師（青木，2005年；野田，1998年；森村，1983年；吉開，1981年）もいれば、人を教え導いたり人の道を説いたりする立場にある教師や僧侶（笠原十九司，2006年，40ページ；曾根，1988年，183-185ページ）もいるのです。

侵略戦争で残虐行為が頻発する理由については、これまでもいくつかの仮説が提出されています。リフトンは、後にPTSDを起こす要因になるかどうかは別にして、「残虐行為を生み出す状況 atrocity-producing situation」という概念を唱えています（Lifton, 1973, p. 65）。これは、それまで人殺しなどしたことのない、善良な「ふつうの人々が、容易に残虐行為に及んでしまうような心理的および軍事的状況」（Lifton, 2004b, p. 416）のことです。アメリカ軍にとって初めての戦闘形態となった、前線なきゲリラ戦を特徴としたベトナム戦争の場合、それは、次のような条件がそろった時だそうです。

- 1 「無差別発砲容認地帯」——事実上、誰に向かって発砲してもかまわれないとされる地域にいたこと
- 2 「敵方の戦死者数」——〔民間人と敵の区別が困難なことから〕戦闘員と民間人の識別を絶えず迫られるため消耗しきっていたこと、および、敵を何人殺したかで、部隊長同士が張り合っていたこと
- 3 姿の見えない敵に戦友が殺されたことかたきで悲しみ怒りながら、何としてでも“敵”を見つけ出し、その仇を打ちたいという切迫した心理状態に陥っていたこと
(Lifton, 2004a, p. 4)

大量殺戮は、単独ではできないため、必然的に集団の行為になります。社会生活を営んでいる時にはごくふつうに暮してきた、復員すれば、ごくふつうの市民に戻るはずの個々の兵士（ベトナム戦争の場合のアメリカ兵は、ほとんどが、貧困家庭出身の20歳前後の青少年）が、いともたやすく虐殺集団に加わってしまうのは、リフトンによれば、こうした「残虐行為を生み出す状

加害者と被害者の“トラウマ”

況」に置かれるためだと言うのです。

誰に向けて発砲してもよいと、侵略する側（の上層部）が勝手に決めた地域にいて、たとえば、姿の見えない敵のしかけた地雷によって目の前で戦友の脚が吹き飛ばされたり、密林に潜むゲリラに上官が狙撃されたりして、復讐心が煮えたぎっている状態で、敵が潜んでいるとにらんで急襲した近くの村に、ただの農民しかいないように見えても、疑心暗鬼に陥ったり、血気にはや逸ったりするあまり、「プラトーン」というアメリカ映画に描き出されているように、時として、老人や女性や子どもを中心とした村人たちへの暴行や虐殺が始まるということです。とはいっても、戦果が得られないまま自陣に戻るのを恐れ、あせった小隊長がひとこと命令を発するとか、憤懣や復讐心を抑えようともしない凶暴な一部の兵士が口火を切るとかのきっかけは、やはり必要になるでしょう。^[註1]

残虐行為が容認された状況は、その暴走集団にきわめて強い吸引力を生み出すため、残虐行為に加担するのを嫌う兵士をも屈服させる力を持っています。しかしながら、その一方では、自分で手を下すことに強いとまどいやためらいを隠せない新兵も少なくないはずで、平時とそうした異常時との間に高くそびえるその壁を、ごくふつうの人間が比較的簡単に乗り越えることができるのは、各人が一種の解離状態に入ることにより、別の自己（“代役”）が作りあげられるためだと、リフトンは考えます。かくして、その“第二自己”

[註1]あるいは、最初からその基準が下達されていることもあるようです。ベトナムの戦場を長期取材した本多勝一が（南）ベトナムのビエンホア基地の病院で取材した18歳のアメリカ兵に、「地雷が爆発したら、見える限りの農民を皆殺しにして報復することもあるという噂もきいたが、本当か」という質問をしたところ、その兵士は「本当だ」と認めています（本多，1981年a，182ページ）。

[註2] 中国大陸の日本軍は、新兵たちにその「度胸をつけさせる」ため、杭に縛りつけた捕虜や農民を銃剣で突かせる「刺突」と呼ぶ訓練を組織的に行なっていました（たとえば、本多・長沼，1991年，371ページ；三笠宮，1994年，55-56ページ）。その“入門式”を経て、人を殺したことのない陣営から、殺したことのある陣営へと移行するのです。この過程については、曾根の著書（1988年）の「普通の人間から戦場の兵隊」という章や、本多・長沼の著書（1991年）の「殺人教育」という章などに詳しく描かれています。

のおかげで、本来なら（いわゆる良心の監視があるため）強い嫌悪や不快を感じざるはずの行為に、造作なく手を染めることができるようになり、それによって残虐行為を生み出す状況に適応できるというのです（Lifton, 2004a, pp. 4-5）。

リフトンの概念の不足

リフトンの考えでは、「残虐行為を生み出す状況」に置かれた人間は、そうした状況に適応するための手段として、第二自己を作りあげることになるわけですが、では、そうした状況に「適応」しようとするのは、どうしてなのでしょう。人間は、環境に自動的に適応するように作られた機械ではないのですから、その行動が重要なものであればあるほど、自分（の意識）を説得するための理由（口実）とは別に、その主体的理由が必要になると思います。しかしながら、精神分析という受動的人間観を着想の基盤としているためか、リフトンは、その点について特に考えてはいないようです。

それに対して、日中戦争の特に初期に、筆舌に尽くしがたいほど残虐な行為を中国人に対して行なってきた元日本兵たちは、リフトンが列挙したものと多少なりとも重なり合う条件に加えて、それ以外の要因についても異口同音に語っています（たとえば、朝日新聞山形支局, 1991年；東, 1987年；笠原十九司, 2002年, 第I章；曾根, 1988年；中国帰還者連絡会, 1984年；星, 2002年；本多・長沼, 1991年；森山, 1975年）。それは、おおよそ次のようなものです。

- 1 〔対ソビエト戦に備えて精鋭を温存すべく、多くは家庭を持つ年長の在郷軍人が召集されたため〕 応召すること自体に、そもそも不満があったこと
- 2 遺書を書くことを命じられるなどにより、生きて帰れないことを思い知らされ、自暴自棄的になっていたこと
- 3 上官による“絶対服従”の命令に従わなければ、即座に殺害される可能性があることを含め、自分のほうが重罰を科せられてしまうこと
- 4 予想外の苦戦を強いられたうえに、不満足な装備のまま、さらなる進撃を迫られたことなどから、憤懣や復讐心が高まっていたこと
- 5 個々の部隊や兵士が、互いに戦功を競い、先陣を争っていたこと
- 6 中国人を人種的に見下し、人間として扱おうとしていなかったこと